

## 【映画「帆花」上映会の成功をめざして】

### 帆花さんとは時代の先頭に立つ存在である

二通 諭

私は、ある自主上映会のトークで、「映画の中の障害者は今日も時代の先頭に立っている」という演題で話題を提供したことがある。このことを映画「帆花」(監督／國友勇吾：2021年)を鑑賞して思い出した。というのも、本作の帆花さんは、どう形容されるべき存在なのかと考えたときに、まさに時代の先頭に立っている、というかつての演題がその答えとして私の脳裏に降りてきたからだ。さらに言うなら、帆花さんは時代の守り手のような存在である。もちろん本作自体は、帆花さんをこのようには語っていない。本作の真骨頂は、いのちの重みや輝きといったものを丁寧に、精緻に捕捉した点にある。しかし、帆花さんが、時代の先頭に立っている存在、時代の守り手のような存在であるということを、誰かが言わねばならない。となれば、ここは長年にわたり障害者映画を見つめ続けてきた私のような者がそれを担うべきなのだ。

本作は、生後すぐに「脳死に近い状態」と宣告された娘・帆花(ほのか)さんと母・西村理佐さん、父・西村秀勝さんの日常に密着したドキュメンタリーである。

理佐さんは、帆花さんから「いのちとは、生きるとは、ただ“そこに在ること”であり、そのかけがえのなさこそが“いのちの重み”であることを教えられた」(本作パンフレット)と述べている。その一方、作中で「世界の中に私と帆花の二人っきりみたいな気分になる時がある」と自身の心境を吐露している。ここでの「私と帆花の二人っきりみたいな気分になる」というネガティブな響きをもった言葉は、半面において、理佐さんが帆花さんと共に最前線、すなわち時代の先頭に立っていることの証左でもある。加えてその状況をカメラによって凝視しようとする映像作家・國友勇吾を引き込むことになった。

本作には、72分の本編のほかに、16分の短編「9年後の西村家」(2023年5月撮影)がある。本編は、表情、声、右手の動きが出るようになった帆花さんが特別支援学校小学部入学までの道程を描き、短編は、小学部・中学部を経て高等部入学という地点まで到達した帆花さんと、この段階における理佐さんの「所感」に焦点を当てている。



ここでは、短編における理佐さんの「所感」を取り上げておこう。

まずは、帆花さんにとっての学校である。理佐さんからすれば、これまでケアをする人との関係しかもっていなかった帆花さんゆえ、学校生活をうまく送ることができるのかと心配になる。ところが、入学式で先生が「お預かりします」と言ってバギーを押してくれたとき、帆花さんは、理佐さんに対して「私は大丈夫」という気持ちを表情(顔)で伝えたようなのだ。これは間身体、間主観による通じ合いとっていいだろう。学校には、友達や多くの先生など「ケアする・される」以外の関係がある。遠足や運動会など刺激に富んだ行事もある。では、学校卒業後はどうなるのか。理佐さんにとっては、このことが次のテーマになっているはずだ。学校には、教職員が思っている以上の力が宿っている。そんな学校の意義が本作(帆花さんご家族)によって逆照射された。

理佐さんは、19 人もの重度障害者が殺害された津久井やまゆり園事件(2016 年 7 月 26 日)のことも話題にする。これこそ他人事ではない。差別、分断、排除の思想と感性には一定の歴史性、根深さといったものがある。今般の参議院選挙でも、半数以上の政党が外国人を敵視する排外主義的な政策を競い合う展開になっており、これを放置するなら他のマイノリティーにも波及することになるだろう。こうした流れに抗うのが本作なのであり、抗う主体が、帆花さんと西村家のみなさん、支え手になっている周囲のみなさん、本作の上映を成功させようとする私たちなのだ。私が、帆花さんを「時代の先頭に立っている」、「時代の守り手である」と考える所以(ゆえん)である。

理佐さんが目標にしていることは、帆花さんもまたコミュニティの隣人になること。したがって、それぞれが良き隣人として機能するコミュニティをつくることが課題となる。

本作を鑑賞したなら、戦争なんてやっている場合ではないと心底思う。ガザの子どもたちが、イスラエルの兵士によって殺されているというニュースに接するたびに帆花さんのことを思い出す。「この映画を見ろ！」と言いたい。世界の戦争当事国に本作を届けることは難しいかもしれないが、少なくとも国内、道内での上映は進めることができる。

人間性に目覚める、人間性を取り戻すといった生涯発達の課題にも応える一作である。まずは、チラシをコツコツ配布し、券を売ることから始めたい。

**== 本作は北海道初公開です ==**

**全障研前売券(1000 円)の予約は二通へ一報ください。**

**当日は混み合います。“券の事前購入”または“当日会場払いの予約”をお勧めします。**

**携帯電話(二通：ショートメール可)：090-2697-0496 メール：nitsu@mvg.biglobe.ne.jp**